

## デモと安保法案

ライター：細江美月 小俣芹夏 荒牧萌子 佐藤山葉 谷藤莉里子 千葉尚志

エディター：佐藤山葉

日本の安全保障の大きな転換期を迎えた昨今、その議論の肝となる安全保障法案について多くの議論がなされている。本法案の具体的な内容や、本法案が可決された場合に想定されるメリットとデメリットなどに、専門家や政治家にとどまらず、多くの国民が注目している。

日本政府は、今年の9月19日に参院本会議を開き、与党などの賛成多数で安全保障関連法案が可決、そして成立した。安倍政権において最も注目度の高かった本法案は、日本の戦後政策の大転換と位置づけされた。これは、集団的自衛権の行使を可能にするほか、後方支援を認める他国軍による海外活動の範囲を拡大する。また、国連平和維持活動（PKO）の活動範囲も緩和され、日本は今まで以上に国際社会に貢献できるとされる。

一方、日本国内の世論は反対の声が高まっており、全国各地で毎週のように大規模な反対集会やデモが行われている。2015年9月24日（木曜日）にも国会議事堂正門前でのデモが行われた。地下鉄の駅を出ると、70代の女性がデモの誘導係をしていた。彼女の指示に従い、国会議事堂に向かい歩いていくと、デモの声は次第に大きくなり、太鼓の音までも聞こえてきた。そこには大勢の人たちがいた。

「孫の世代や息子を戦争に行かせたくないという気持ちが強くなり、デモに参加します」と述べるのは、75歳の夫と共にこのデモに参加していた68歳の女性だ。

彼女は、日本が戦争をする国になるのではないかという不安を抱き、さらには、政府は法案に対しての説明責任を果たしていないと問題視している。

「安倍首相は、歴史を修正している」と話す69歳の男性は、首から赤と青に光るライトを掛けており、両腕を振り回しながら「戦争反対」と主張していた。彼も、政府の一方的な解釈作りを危険視している。

彼は、例えば国民の声が政府に届かないのだとしても、意思表示をし続けるのは重要なことだと主張していた。そして、若い世代は「戦争」に馴染みがないため集団的自衛権を受け入れやすいとも述べていた。戦争の記憶が薄れていく中、戦争を体験した80代や90代が後世に伝えていく必要があると語っていた。

『戦争反対』と書かれたカードを抱えながらデモに参加する66歳男性は、デモへの参加動機として、「ずっと前からこの安倍という人に不信感を持っている」という。今回の法案

を通し方は違憲であるが、それ以前にこれまでの安倍首相の政治的行動への不信感から、多くの人が「いまの政治はおかしい」と感じてデモに参加していると彼は考える。また、「日本の国民は嘗められている」とも話す。フランスでは、民衆がデモをしたときに、当時大統領であったサルコジ元大統領自らがデモの民衆の中へ入っていき、民衆たちと顔を突き合わせて討論した。しかし、6月から始まったこの国会議事堂前のデモに対して、内閣は一度も取り合ったことがない。その日も、小雨の中人々を無視するかのように、国会議事堂からは何の音沙汰もなかった。それでも彼は、我々は微力だが、無力ではないと述べる。今後はストライキなどを起こす必要になるだろうと彼は考えている。

「わたしたちは終戦の年に生まれたのよ」と話し始めたのは、手にライトを持った70歳女性だ。その横では同じく70歳の夫が傘を彼女に差してやっていた。

軍事費の増加などを受けて、彼女は国際問題を軍事では外交で解決すべきだと考える。加えて、軍力を高めるよりも先に、東日本大震災や水害などの被害者たちへの支援をするべきだと彼女は述べた。安倍政権は国際平和を今回の法案改正の理由のひとつにかかげているが、国内の問題も解決していないのにわざわざ外国へ行って国際平和を守る必要が果たしてあるのだろうか、と彼女は疑問を呈した。

しかし彼女はこのデモ活動に手ごたえを感じている。デモが始まった6月4日当時は、デモ参加者は700人だった。それが今では12万人にまで増えてきている。また、その日は国会議事堂以外にも、大阪で法案反対のデモが行われていた。このように、全国各地で反対の声が上がってきている。おかしいと思ったことを声に出し、周りのひとに伝えることが大事なのだ。最後に、終戦の年に生まれたことについて彼女は、「わたしたちは平和を守るために生まれてきたと思っている」と微笑んだ。